

平成25年度第一回オゾン等の植物影響評価ワーキンググループ会合 議事概要

日 時：平成25年10月29日（火）14時～17時

場 所：（一財）日本環境衛生センター東京談話室

出席者：伊豆田座長、河野委員、小林委員、清水委員、須田委員、野口委員、村野委員、
家合委員、

環境省：難波大気環境課長、後藤課長補佐

（一財）日本環境衛生センターアジア大気汚染研究センター：林副所長、佐瀬部長、
大泉部長、山下研究員、

会 議 次 第

1 開会

2 議題

- （1）パイロット・モニタリングの進捗状況について
- （2）越境大気汚染・酸性雨長期モニタリング総合とりまとめについて
- （3）その他

3 閉会

（配付資料）

平成25年度オゾン等の植物影響評価ワーキンググループ委員名簿

資料1 オゾンによる植物影響のパイロット・モニタリングの進捗状況について

資料2 越境大気汚染・酸性雨長期モニタリング総合とりまとめについて

別紙1 オゾン等の植物影響評価WG 関連部分の執筆・作成状況について

資料3 オゾン等の植物影響評価WG の今後の予定

参考資料 平成24年度WG 会合議事概要

議事概要

1. 開会

- ・開会(佐瀬)、主催者挨拶(林)、環境省挨拶(難波課長)
- ・出席者紹介、配布資料の確認(佐瀬)
- ・伊豆田座長へ進行役を委任(佐瀬)

2. 議題

(1) パイロット・モニタリングの進捗状況について

- ・資料1について事務局より説明
- ・資料1別添1（北海道）について野口委員より説明
- ・質疑応答

【小林委員】ピーク時の時刻について教えてほしい。

【野口委員】ピークの時刻については詳細に把握していないが、摩周湖の特徴として日中に限らず移流の影響を受けて夜間に高濃度になることがある。

【村野委員】ピーク時の時間の幅を明示した方が良い。特徴的なピークについては1-2日程度の軸で示してほしい。また、周遊道路の影響についてはどうか。

【野口委員】資材置き場などがあるため、工事車両の出入りの影響は否定できない。また、冬季はスノーモービルが近隣まで侵入する可能性がある。

【伊豆田座長】NO_xは測定しているのか？

【野口委員】測定しているが数ppbのレベルである。希に高い値も見られるが、同時にSO₂濃度も上昇しているため、ローカルな影響のみでは説明できないと考えている。

【河野委員】地域間比較のためにも、AOT40や全体の平均等を示してほしい。

【事務局】その点に関しては去年までのデータについて、総合取りまとめ（4章2節）に示してあるので参照してほしい。

【野口委員】摩周湖の場合、4月を入れるかどうかで全く異なってくるため注意が必要。

【村野委員】竜飛の観測データも含めてみたらどうか。

【野口委員】方向としては主に南西から流入するため、利尻と摩周湖の時間的な差は無いと考えられる。時間差が大きい竜飛を含めることで、広域の影響を考察できるかもしれない。

- ・資料1別添2（新潟）について家合委員より説明

・質疑応答

【村野委員】八海山については新潟と関東側のどちらの影響が大きいのか？

【家合委員】南風の時期（夏期）には関東地方からの移流の影響が大きいと考えられる。

【伊豆田座長】この結果を見ると春が高く夏は低い。関東では夏の方が高いため、明瞭に状況が異なる。また、山間部では傾向が不明瞭な場合がある。

【河野委員】八海山に限らず、本年度は全国的に低濃度の傾向がある。

【村野委員】冬季に測定できないのはなぜか？メンテナンスが困難であれば、除雪の民間委託も含めて検討する必要がある。特に、オゾンが高濃度となる春先に測定できていない現状には問題がある。

【家合委員】オゾン計は寒冷地では問題が生じないのか。

【野口委員】寒冷地でも問題なく動作する。電源があるのでヒーター（エアコン）等を用いればなお良い。

【河野委員】山麓で測定してはどうか。

【家合委員】山麓では日変動が顕著に見られるため、山頂と状況が異なる。

【家合委員】（展望台でなく）山頂駅で測定するという方法はあるが、標高が 30-40m 異なる。また、人の出入りも多いので、注意する必要がある。

【村野委員】まず、本当に必要な値なのかどうかを明確にする必要がある。その上で、（10月~5月のデータが）本当に必要ならば、冬季測定の対策をしっかりと立てる必要がある。

【野口委員】近年、各地のモニタリング地点でオゾンが低下傾向にある。PM の量と関連がある可能性もあるが、メカニズムについてはよく分かっていない。

【伊豆田座長】植物影響を考慮した場合、ブナの葉が出る 5 月に測定されないのはやはり問題が多い。冬季から春にかけての測定を実施してほしい。

【事務局】除雪に限らず、機器のメンテナンスについて慎重になる必要がある。気温変動に加えて、気圧の問題、またインレットの部分に雪がかぶらない工夫など、課題が多いのでよく検討する必要がある。

・資料 1 別添 3（福岡）について須田委員より説明

・質疑応答

【村野委員】5月24日及び26日に英彦山と摩周湖でピークが見られている。九州で影響を及ぼした気塊が北海道まで到達したと見ることはできるか。

【野口委員】必ずしも、九州方面からの気塊が北海道に到達するわけではない。春先までは寒気に覆われているため、その影響は更に複雑である。同一のタイミングで発生したものがそれぞれ別の経路を通過して九州と北海道に到達する可能性はある。いずれにせよ、観測ではなく、モデル結果からの理解がより有効と考えられる。

【伊豆田座長】ブナの開葉は5月か？

【野口委員】5月の初旬と考えて良い。個体差もある。落葉は10月末である。

・知床半島における本年度の異常落葉について清水委員より説明

・質疑応答

【伊豆田座長】標高が高いところで明瞭に異常落葉しており、斜面の方向性（南東斜面のみ影響が現れている）もはっきりしている。南東の風の影響を受けているのではないか。

【野口委員】この件の経過としては、NPO からまず北大に話があり、北大の渡辺誠さんから清水委員に連絡がいったとのこと。話を受けたところでいろいろな要因の可能性を示されているので、その過程で NPO の方に多少の先入観が生まれたかもしれない。例えば、現在はオゾンや酸性霧などの可能性を言われている。

【野口委員】流跡線解析によれば、釧路方面から知床の方に流入する状況がある。少し西側にずれば摩周湖の方に向かうと考えられる。霧は根室方向から摩周湖、あるいは知床の方に向かうことはあり得ると思う。

【村野委員】まず気象条件をよく吟味する必要がある。例年と比べて気象条件が変わったのかもしれない。特に気流が例年と変わったのかもしれない。今年は夏が長く気温が高かったため、光化学反応がより進んだ可能性も捨てきれない。

【野口委員】摩周湖でのフィルターパックのデータを見てみる必要がある。今年、特に高

かったという印象はない。

【村野委員】報告された方が、何年くらい観察を続けていたのかが重要な情報である。2～3年観察しての異常なのか、10～20年での異常なのかでは話が変わってくる。まずその点を良く確認した方が良い。いずれにせよ、(異常の観測された斜面の)方向性がはっきりしているというのは有力な証拠になり得る。

【伊豆田座長】奥日光も南東斜面は枯れており、方向性があるのは有力な証拠である。

【野口委員】南向きは乾燥ストレスがかかりやすい。この点についても留意する必要がある。

【村野委員】低気圧や台風の影響等はどうか。

【野口委員】この地域では台風の影響はでにくいと考えられる。風害の影響は少ないのでは？

【河野委員】(物理的な)風ストレスの可能性が高いと考える。南側からの風が尾根を超えて風速が落ちる。異常高温等も含め、風ストレスとの複合影響ではないか。全体として今年はおゾン濃度が低いため、オゾンの影響のみを考えるのは適切でない。

〈パイロット・モニタリング全般についての質疑応答〉

【野口委員】大気の専門家でも手軽に測定できる項目はないか。バッテリーや脚立などを用いて測定できないか。

【河野委員】携帯できるバッテリーで駆動するスキャナーを持って葉をスキャンするのはどうか。大政委員にも意見を聞いてみたい。リモートセンシングを使わなくとも、できることはある。

【清水委員】影響の出そうな個体を選択して連続撮影するのはどうか。

【事務局】SPADで毎年測定したら徐々に弱まっていくのが検出できる可能性はあるのか。

【伊豆田座長】季節性は明瞭に出る場合があるので、月1回でも測定することで、例年より秋から冬にかけてのSPAD値の落ち方が速い、などの特徴が見えるかもしれない。

【須田委員】野外の樹木は個体差が大きいため、個体を選定して同一木あるいは同一の枝の傾向を追っていく必要がある。

(2) 越境大気汚染・酸性雨長期モニタリング総合とりまとめについて

- ・資料2について事務局より説明
- ・試料2のレビュー部分について伊豆田座長より説明
- ・質疑応答

〈AOT40を採用する根拠〉

【河野委員】AOT40を計算することについて、日本において40ppbで切ることの根拠(基本的なスタンス)を議論に含めた方が良い。例えば、ヨーロッパでは25ppbでやったら多くの地点で基準を超えてしまったから40ppbにした経緯がある。ヨーロッパに倣うということであればそれでも良いと思うが、いずれにしてもきちんと明示すべきと思う。

【事務局】これまでの議論の中でAOT40を採用するという点については合意を得られていると考えている。一方、今後についての明確な方針がないのが現状である。

【河野委員】収量や生長量との関連で見た場合、AOT40を採用すると良い線形が得られるという点が根拠になっている。自治体等にとっては平均濃度の方が計算はより楽であるし、実際はAOT40と比べて顕著に異なるというわけではない。

【清水委員】以前の河野委員の研究で、AOT0 で一番相関が高いとの報告もあった。(最も相関が高いという点で AOT40 にするには無理があるため) 40ppb を採用するならば、ヨーロッパの基準に合わせるという点が最も明確である。

【小林委員】AOT60, AOT40, あるいは AOT0 と話に出たが、各基準に対する収量なり生長量低下なりに基準間でリニアな関係が認められるのかどうかを確認した方が良い。そのような関係があるならば、単に換算すればいいだけの話なので、基準の選択などはあまり問題にならない。日本の対象地域で確認してみる必要がある。

【伊豆田座長】基本的には正比例の関係にあると思うが、一日を通じて濃度があまり低下しない山間部では状況が異なっているかもしれない。よく確認する必要がある。

【村野委員】ヨーロッパにおける AOT40 というのは農作物が対象ではないのか。林木でどの程度の意味があるのか。

【河野委員】AOT40 の積算の期間が異なっている。作物なら 3 ヶ月程度である。

〈吸収量ベースの基準を採用する必要性〉

【伊豆田座長】現状では吸収量ベースで考えるのが基本になりつつある。

【野口委員】インファレンシャル法から吸収量ベースのフラックスを求めるのは容易なのではないか?ただ、吸収量ベースと生長低下率の関連をどう考えるかが問題である。

【伊豆田座長】吸収量を出せるものの、積算吸収量と実際の生長量との関連がよく分かっていない。ブナを用いた研究では AOT40 に比べ吸収量ベースの方が、相関が良好であった。ただし、両者で大きく異なるわけではない。

【事務局】吸収量ベースのフラックスとインファレンシャル法によって算出されるフラックスは同じではないので注意する必要がある。実際には気孔コンダクタンスなどを踏まえた上での算出が必要。

【事務局】吸収量ベースの基準は将来的に広域にスケールアップできるのか。

【伊豆田座長】現状では困難である。特に樹種によって気孔コンダクタンスとの関係式が顕著に異なるため、各樹種についての関係式を作る必要がある。吸収量ベースで全国レベルのマッピングができるようになるにはまだ時間がかかる。

〈モデル推定値の不確実性について〉

【野口委員】モデル推定値の不確実性はどの程度なのか。実測値と比較した検証結果を示す必要があるのではないか。

【河野委員】現状ではオゾンに関してモデルと実測とは合っていない。モデル推定値の平均値が高めに出る傾向にある。

【事務局】現在、EANET 地点における 2006 年からのデータとの検証を実施している。

【村野委員】なぜモデル推定値が合わないのか。

【河野委員】反応系を全部シミュレーションしきれていないためと考えられる。また、基本的にはトレンドを合わせているため、実測値の絶対値とのパラメタリゼーションを実施しているわけではない。イベントや年間を通した平均濃度などを合わせている。そのため、AOT40 等の基準にすると合わなくなってしまう。

【小林委員】農作物の場合は顕著であるが、境界層で低下するところを考慮しないと明らかに過大評価になる。

〈その他〉

【村野委員】 p.22 でパイロット・モニタリングの基本設計が述べられているが、これらはほとんど達成されていない。この回答を用意する必要がある。

【事務局】 この部分は削除する。

【村野委員】 図 4-2-3 の作図に工夫が必要。

【事務局】 各グラフの Y 軸を一致させる等して修正する。

【事務局】 摩周湖における PO の測定の硝酸の感度に関しては問題にはならないのか。他のリモート・ルーラルのモニタリング地点と異なり、この場合、NO_x-NO を NO₂ として算出して用いている。他の章との整合性を取るためにも但し書きを付けた方が良い。

【野口委員】 「近傍で発生される発生源の影響を抑えるため・・・」という但し書きを付ける。

(4) その他

・質疑応答

【伊豆田座長】 総合取りまとめの草案について、会議の 1 週間前には各委員に送付してほしい。

【事務局】 承知した。

3. 閉会

- ・伊豆田座長の進行役解任
- ・閉会(佐瀬)

以上

平成25年度第二回オゾン等の植物影響評価ワーキンググループ会合 議事概要

日 時：平成25年12月10日（火）14時～16時30分

場 所：（一財）日本環境衛生センター東京談話室

出席者：伊豆田座長、大政委員、河野委員、小林委員、清水委員、須田委員、滝川委員、
野口委員、村野委員、家合委員

環境省：後藤課長補佐

（一財）日本環境衛生センターアジア大気汚染研究センター：林副所長、佐瀬部長、
大泉部長、山下研究員、

会 議 次 第

1 開会

2 議題

- （1）越境大気汚染・酸性雨長期モニタリング総合とりまとめについて
- （2）その他

3 閉会

（配付資料）

平成25年度オゾン等の植物影響評価ワーキンググループ委員名簿

資料1 越境大気汚染・酸性雨長期モニタリング報告書（平成20～24年度）案

資料2 越境大気汚染・酸性雨対策検討会に係る今後の予定

参考資料1 平成25年度 オゾン等の植物影響評価ワーキンググループ会合議事概要

参考資料2 平成25年度オゾンによる植物影響のパイロットモニタリング報告（摩
周湖周辺）（改訂版）

議事概要

1. 開会

- ・開会(佐瀬)
- ・出席者紹介、配付資料の確認(佐瀬)
- ・伊豆田座長へ進行役を委任(佐瀬)

2. 議題

(1) 越境大気汚染・酸性雨長期モニタリング総合とりまとめについて

- ・資料1(1章から3章)について事務局より説明
- ・質疑応答

【村野委員】図3-2-17について、硫黄と窒素の沈着量を示す地図が逆になっているのではないかと。

【事務局】後で確認する(注:後日、逆であることが確認されたので訂正済)。

【野口委員】表2-1について、札幌のSO₂及びNO_xのデータは含まれないのか。

【事務局】長期モニタリング計画において、札幌についてはオゾンのデータのみとしている。データがあるのは承知しているが、酸性雨モニタリングとしては集計をしていない。

【清水委員】表3-2-5における土壌の値の変化は何年間での変化なのか。比較対象年の詳細はないのか。

【事務局】年次は付表に入っている。また、図3-2-3及び3-2-4にも図示してあるので参照いただきたい。

【須田委員】図3-2-6、図3-2-7等の植生調査の結果を見ると、いくつかの地点でダイナミックに変化している。その要因について、吉野熊野でシカ防護策などについて記述してあるがそれ以外に関しては特に記述がない。他の変化例についても、各自治体の報告書を参照して変化要因を述べてほしい。

【事務局】最終版までに説明を加える。

【村野委員】自動測定局のSO₂はどの程度の低濃度まで信頼できるのか?また、こうした低濃度を測定し続けることに意味があるのか?今後のモニタリングの位置付けをはっきりさせ、あまり意味が無いことに関しては止めるという選択肢もありうると思う。特に、極端に低い濃度を測定し続ける必要があるかどうか、十分に議論してほしい。そうした内容を議論する場を設けた方がよい。

【事務局】低濃度SO₂の精度に関して言えば、本モニタリングを通して自動測定値とフィルターパックの比較を実施しており、低濃度であってもデータの精度としては悪くないことを確認している。また、冬季に高い傾向が見られたり、イベント(ピークやスパイク)として高いものが検出されたりする場合もある。モデルの解析にとってこうしたピークやスパイクの情報は大変意味がある。越境大気汚染、桜島の火山等、こうしたデータが監視の意味で必要とされる場面も多いと考えている。

【村野委員】確かに九州では必要かもしれないが、それ以外のところでは監視の機能として薄れている面がある。場所を取捨選択する必要がある。

【野口委員】利尻などではPMとともにSO₂のイベントなどが確認されている。長距離輸送に関するチェック機能という意味もあると考える。

【事務局】地点毎にも評価する必要がある。例えば、小笠原でも必要かどうか、議論の余地がある。今後の方針等にも書き加えていく必要があるかもしれない。窒素酸化物については、遠隔地で NO₂ を正しく評価できていない。次の更新時には正しく測定できる機種を導入するべく努力する方針でいる。

【伊豆田座長】表 3-2-5 におけるオゾンによる推定成長低下率について、各地点で樹木が違うはずだが、どのように選択しているのか。

【事務局】各プロットの優占種を採用している。表 3-2-4 にも記載がある。

【伊豆田座長】分かりやすくするため、表 3-2-5 に評価対象樹種を明記した方がよい。

【事務局】そのように修正する。

【野口委員】2011 年以降の自動測定装置の校正法の変更によるモニタリングデータへの影響はないのか？また、多くの地点で Thermo Fishers から堀場製作所への機器更新があったが、これらの変更点に関する但し書きが必要ではないか。

【事務局】校正法の変更や、機器更新の前後でデータの連続性にギャップがある地点が存在する事は承知している。ただ、そうした地点では校正記録等を特によく確認しており、結果として問題が認められないということで、データを採用して記載してある。但し書きを書く根拠はないと考えている。また、研究レベルでは校正法による違いなどについて報告があるかもしれないが、本モニタリングの中では、まだ十分に確認できていない。

【野口委員】せめて校正法が変わったという事実について明記する必要がある。

【事務局】方法の部分にそのような但し書きを含めることを検討する。

【環境省】学会等でそうした報告があったことは承知している。なお、平成 22 年度中に校正方法が変更された点については環境省としても文章を出している。

【村野委員】酸性化した湖沼の定義（基準）はないのか？例えば、夜叉ヶ池の酸性化について、「酸性化の傾向がある」だけでなく、もう少し踏み込んだ議論が必要である。

【事務局】現時点で酸性化の可能性が高い点について議論している。今後、更に踏み込んだ議論を行うための追加調査の必要性について、現在、環境省とも相談を進めている状況である。

【村野委員】酸性化した湖沼であると言い切った上で、土壌種によってはこうした状況が進むこともあるし、そうでない場合もあると述べた方がよい。陸水の専門家の方々にはもう少し踏み込んだ議論をお願いしたい。

【事務局】明後日の生態影響評価 WG でこの問題を提起させていただきたい。

・資料 1（4 章）について事務局から説明

・オゾン濃度推定におけるモデルと観測値の適合性について滝川委員より説明

【野口委員】図 4-1-1 及び図 4-1-2 について、利尻のデータが含まれていない。

【事務局】早急に確認する。

【村野委員】赤城のオゾン濃度が H22 から H23 に急激に低下しているのはなぜか。

【事務局】H22 の途中で校正方法が変わったものの、十分に検証した結果、問題がないと判断してデータを採用している。

【伊豆田座長】各月の値のことを月間と表現しているが、これは適切かどうか。

【事務局】月間値、月平均値等に修正する。

【河野委員】非遠隔地と遠隔地の定義は何か？

【事務局】これは EANET ガイドラインに従っている。遠隔地の場合、半径 50km 以内に

大規模発生源がない事と定義される。

【小林委員】オゾンによる予測成長低下率のマップ（図 4-2-2）について、各点は何を示しているのか？グリッドサイズはどれくらいか？

【事務局】環境省植生図における 3 次メッシュのグリッドを示している。グリッドサイズは 1km×1km である。説明を図の脚注に追加する。

【河野委員】各樹種の分布に使用した植生図（群集・群落名等）について、選択基準を明示する必要がある。

【事務局】群落選択の基準を脚注に明記する。

【伊豆田座長】図 4-2-2 について、2008 年のインベントリと 2011 年の気象場を用いて推定された AOT40 を使用していることを図の説明に加えた方がよい。

【事務局】図のタイトルについて、2011 年の気象場により推定された AOT40 を用いた旨がすぐに分かるように修正する。

【村野委員】オゾン濃度のモデルに自動車の影響は考慮されているか。

【滝川委員】使用したインベントリでは REAS ver.2.0 に月平均値、EAGrid2000 に（空間分解能は低いものの）時間値の自動車排出量データが含まれており、影響は考慮されている。

【大政委員】図 4-2-2 について、成長低下率が大きい地点を抽出する目的からしても、最大値と最小値が具体的に把握できるようにした方がよい。

【事務局】各樹種について最小値と最大値が分かるような説明を加える。

【伊豆田座長】パイロットモニタリング実施地点の写真について、摩周湖のみ空撮写真であるため植生の状況が分からない。

【事務局】地上での植生の状況が分かる写真に切り替える。

【伊豆田座長】平成 24 年度植物成長期におけるオゾン濃度の概要について、1ppb 以下のレベルまで必要なのか。ppb で小数点一桁は必要か。

【河野委員】平均値であるので、小数点一桁に統一すれば良い。AOT40 についても 2 桁は必要ない。

【事務局】前節等も参考にして修正する。

【小林委員】図 4-2-2 について、これは予測ではなく推定である。文章中も含め、予測成長量低下率となっている部分は全て「推定」に訂正する必要がある。

【事務局】そのように修正する。

【清水委員】図 4-2-2 について、凡例の値の範囲が 1.1-2.0、2.1-3.0 となっているのは、理解はできるが、少し不自然に見える。

【伊豆田座長】図 4-2-1 の AOT40 の地図について、カラーマップのスケールが分かりにくい。もう少し細かいラベルが必要。

【事務局】それぞれ、凡例を工夫して修正する。

【河野委員】図 4-2-5 について、摩周湖のみ PO（ポテンシャルオゾン）が入っているがなぜか。

【事務局】摩周湖のみ駐車場の影響を考慮して PO を同時に示した。他地点についてはそのような影響はないと考えられるので含めていない。

【河野委員】実際にそこまで大きな影響があるのか？

【野口委員】大型バスが大量に停車すると大幅に低下する場合がある。こうした影響を考慮するために PO を示した。

【事務局】八海山の麓のデータがここでは示されていないが、データは頂いているため、最終版には含める。また、各地点の概要に緯度経度を含めることとする。さらに、ハイフンの長さ、単位の前のスペース等、書式については最終版までにチェックする。

【小林委員】表 4-2-2 のオゾン濃度は何を示しているのか。また、AOT40 の積算時間の表現を明確にする必要がある。

【事務局】全時間の時間値から算出されたものである。注釈に示す。また、AOT40 の算出方法についてもさらに詳細に示す。

【小林委員】表 4-2-2 について、最大値と最小値ではなく、パーセンタイル値、例えば 95 パーセンタイル値等で示した方がよい。また、八海山の AOT40 の積算期間が異なっているため、この点を明示する必要がある。

【事務局】最大値・最小値については、95 及び 5 パーセンタイル値に修正する。注釈に AOT40 の積算について 6 時から 18 時（12 時間）とした旨を示し、八海山についても補足を加える。

・資料 1（5 章と 6 章）について事務局から説明

【河野委員】国際間のネットワークの記述に関し、例えば、ICP vegetation でのオゾンのタスクフォースについては全く触れられていない。植生に関する国際ネットワークについて、今後、どのように取り組んでいくかについて、検討してほしい。RAPIDC というインド、マレーシア、バングラデシュ等の南アジアを中心としたネットワークなどについても意識された方がよい。情報が東アジアに偏りすぎている。

【伊豆田座長】来年の 5 月には中国でオゾン植物影響の国際シンポジウムが開かれる。植物関連の国際的な枠組みについての記述をもう少し考慮された方がよい。

【清水委員】6 章の課題について、「対策」という言葉が入っているが、「対策」という用語と書かれている内容とがあまり噛み合っていない。

【事務局】「取り組み」等に修正する。

【河野委員】報告書の名称はモニタリング報告書であり、本ワーキンググループは植物影響評価ワーキンググループであるから、議論の内容と報告書の名称に若干のずれがある。

【伊豆田座長】報告書にも対策という言葉があった方がよいかもしれない。現時点では難しいと思うが、今後、ご検討いただければよい。

【小林委員】6 章 2 節の既存イニシアティブに関する部分について、隣接する、もしくは重複する南アジアのネットワークと連携していく必要があると考える。ヨーロッパでは ICP-vegetation 等の影響評価に関する科学的なサポートの上に、具体的な対策が進められている側面が大きい。本章に記述されている越境大気汚染対策の推進については全面的に賛同するが、もう少し、植物影響評価の面についても書き込んでいただけると、説得力が増すと考えている。

【事務局】ここで書かれている他のネットワークとの連携については、環境省で予算要求をしており、今後、現実的に活動が進行する可能性のある事案について例示として紹介している。

【小林委員】他地域での事例を挙げ、東アジアでも推進の必要がある、といった書き方をすると説得力が増すのではないか。

【河野委員】タイでも、EANET のモニタリング地点に含まれていない部分が RAPIDC に含まれている部分などがある。範囲が重なりつつあり、連携した方がよい。RAPIDC は植

物影響が中心であり、EANET はモニタリングが中心であるため、だいぶ毛色が違う事も考慮する必要がある。

【滝川委員】 S-7 の後継課題について、文章中で触れた方が全体のバランスがよい。

(2) その他

- ・資料 2 (今後の予定) について環境省から説明があった
- ・質疑応答

【伊豆田座長】 報告書の指摘はいつまで可能か。

【事務局】 年内にお送りいただきたい。

3. 閉会

- ・伊豆田座長の進行役解任
- ・閉会(佐瀬)

以上